大手前大学論集　第17号（2016）pp. 261－274

白虎隊記念碑と下位春吉

― 日伊文化交流の一側面 ―

川　田　真　弘

要　旨

福島県会津若松市東部にある飯盛山は、白虎隊自刃の地として知られ、山の中腹には亡くなった白虎隊士を偲んだ墓があり、その墓の対面にはイタリアから送られたという記念碑がある。この記念碑が寄贈された当時（1928年）の新聞に、下位春吉（1883～1954）という人物が、売名目的で記念碑建立計画を会津出身者に持ちかけた、という内容の記事が掲載されている。

本稿では、下位春吉とはどのような人物であり、白虎隊記念碑がどのような経緯で建立されることになったのかを検討する。

本稿では、まず下位春吉がどのような人物であるのかを示し、また下位名義で出版された本を基に、彼がファシズムをどのように見ていたのかを考える。次いで、外務省外交資料館所蔵の『本邦記念物関係雑件／白虎隊記念碑関係 第一巻』を基にどのような経緯で白虎隊記念碑が建立されたのかを概観。そして最後に、下位がでたらめの白虎隊碑建立計画をもちかけた理由として、下位自身とムッソリーニとの近しさをアピールすることで、日本国内における下位のファシストとしての地位を明らかにすることを目的としていたと考察する。

キーワード：日伊関係、下位春吉、白虎隊、ムッソリーニ、ファシズム

序　白虎隊記念碑について

福島県会津若松市東部に位置する飯盛山は、白虎隊自刃の地として知られている。白虎隊は1868年（慶応四年）に勃発した戊辰戦争に際して、会津藩士の子弟が組織した部隊のひとつである。新政府軍が会津に迫ると、白虎隊も出陣するが、抗戦むなし

く敗走。二十人の白虎隊士が飯盛山に落ち延びるも、会津藩の敗北を悟って自刃し、一命を取り留めた一人を除いて、十九人が死亡した。飯盛山には現在、自刃した十九人の白虎隊士を偲んだ墓があり、その墓の対面には白虎隊の記念碑がある。記念碑の側にある説明文には、記念碑の来歴が次のように書かれている。

> 白虎隊士の精神に深い感銘を受けたローマ市は昭和３年ローマ市民の名をもって、この碑が贈られた。
> この碑の円柱は赤花崗で、ベスビアス火山の噴火で埋没したポンペイの廃墟から発掘した古代宮殿の柱である。

白虎隊の記念碑がどうしてローマ市から「ローマ市民の名をもって」贈られることになったのか。しかも円柱はポンペイの古跡から発掘された古代宮殿の柱であるという。このことについて、記念碑が寄贈されたとされる1928年（昭和三年）４月４日付『東京朝日新聞』朝刊に、「白虎隊碑建立は下位氏の宣伝か」と題した記事が掲載されている。記事によると、1925年（大正十四年）２月に会津若松を訪れた下位春吉（しもい はるきち）という人物が、「ムッソリーニ氏の手を通じ同国の青少年団の義金によって飯盛山上に白虎隊表徳碑建立の計画をもたらし」たという。この計画に会津若松市民は感激したが、しかし待てど暮らせど続報が来ない。不思議に思った会津出身の物理学者で、白虎隊の一員でもあり、後に東京帝大総長となった山川健次郎（1854～1931）が駐日イタリア大使館に問い合わせたところ、この計画が「全く下位氏一個の希望」に過ぎないことが分かった[1]。

この白虎隊記念碑建立問題は、新聞報道をきっかけとして、会津はおろか日本全国から関心が寄せられ、また上述した山川健次郎や幣原喜重郎（1872～1951）といった著名人も興味を持つようになった。日本政府も日本とイタリアの親交に悪影響が出ると判断し、この問題を解決するために腰を上げる。果たして、下位春吉という一個人の出まかせが、政府をも巻き込んだ一大騒動となったのである。

それでは、この騒動の発端となった下位春吉という人物は何者なのであろうか。

一、イタリアファシスト・下位春吉

下位春吉は1883年（明治十六年）、福岡県夜須郡秋月（現在の朝倉市秋月）において、当地の士族、井上喜久蔵の四男として生まれた。なお喜久蔵は1876年に起きた秋月の

1　1928年（昭和三年）４月４日付『東京朝日新聞』朝刊七面

乱に関わっていたが、処罰は免れている。生家の井上家は旧秋月藩に仕える下級武家であり、俸禄も平均的な三十石程度。維新後には典型的な没落士族となった[2]。春吉が生まれた頃、井上家は父母兄弟全員が炭鉱労働者として働かなければならないほど困窮していたが、春吉は学業を続け、福岡県立東筑中学校（現・福岡県立東筑高等学校）に進学している。春吉が東筑中学校を卒業した1902年（明治三十五年）、彼は東京から旅行に来ていた材木商である下位嘉助の目に留まった。下位嘉助は、将来有望な青年として地元では有名だった春吉を自身の後継者にするために養子に迎え、1907年には嘉助の娘、富士と結婚させている[3]。

井上春吉は、材木商の養子となって、下位春吉となったが、事業を継がせようとした養父の思惑とは異なり、下位は東京高等師範学校英語科に進学。東京高師卒業後は、教職に就く。その一方で、下位は童話口演に熱を入れ、1911年には東京高師内に大塚講話会という童話口演サークルを設立し、頻繁に講話会を開催した。1917年には童話口演の理論書として『お噺の仕方』を刊行。下位春吉独自の「お噺論」を基本としているものの、童話口演に際しての注意点や練習法を詳細に著した書である。

また一方で、下位は詩人ダンテ（Dante Alighieri, 1265～1321）にも傾倒していた。中学生のときに教師からダンテの話を聞いて、ダンテに興味を覚えた下位は、東京高師に進み、英文に熟達すると、『神曲』の英訳を読むようになり、さらにはドイツ語やフランス語が出来る友人を集めて、それぞれの翻訳版『神曲』の比較研究をするようになる。また、ダンテを研究するに当たって原書講読に必要な語学力を得るためだろう、下位は教職に就く傍ら、東京外国語学校伊語科専修課程に入学し、1914年（大正三年）３月に卒業。卒業式において、下位がイタリア語で述べた謝辞が評価され、彼は駐日イタリア大使からナポリの王立東洋学院（現ナポリ東洋大学 Università degli Studi di Napoli “L’Orientale”）の日本語教師に推薦された。これがきっかけで、下位はイタリアに旅立つことになる。

イタリアでの下位は、ナポリの王立東洋学院の日本語教師として勤務する一方、現地の文学者や作家たちと積極的に交流した。ナポリの詩人ゲラルド・マローネ（Gherardo Marone, 1891～1962）と共同で日本文学の紹介を行っているのは、その一例である。下位は、マローネが立ち上げた文芸誌『ラ・ディアーナ』*La Diana* に日本の同時代の歌人、与謝野晶子や前田翠渓、泉鏡花の作品をイタリア語に翻訳して掲載した。1917年には、これら発表した作品の他に与謝野鉄幹、佐佐木信綱、吉井勇

2　藤岡寛己「下位春吉とイタリア＝ファシズム―ダンヌンツィオ、ムッソリーニ、日本―」（『福岡国際大学紀要』25号、福岡国際大学、2011年）P. 54

3　Reto Hofman, The Fascist Reflection Japan and Italy, 1919-1950（Colombia University, 2010）P. 25

など「明星」系の歌人の作品も合わせて *Poesie giapponesi*（『日本の詩篇』）をイタリアで出版する。

また下位は、歴史家であり思想家のベネデット・クローチェ（Benedetto Croce, 1866～1952）とも交流があった。クローチェが第二次世界大戦後に発行する雑誌 *Quaderni della "Critica"* の Agosto 1946, No. 5 に掲載された "Ricordi e lettere di amici giapponesi" において、下位について言及する部分がある。"Ricordi..." は、クローチェと日本人の友人や学者との手紙でのやり取りを収めたもので、その中で、クローチェはナポリの文学グループの中にいた日本人、下位春吉について次のように述べている。すなわちクローチェは下位を「Lo Shimoi faceva allora da intermediario letterario fra l'Italia e il Giappone.（下位はそのとき日本とイタリアの間で文学の仲介者として振る舞っていた）」と評し、また下位に小さな絵をプレゼントしたことを思い出している。その一方で、下位がナポリでイタリア人女性に恋したことを知った下位の妻が、彼を連れ戻すためにナポリに来た、とも述べている[4]。

クローチェが下位を「文学の仲介者（intermediario letterario）」と評したように、下位は現地で日本文学の紹介も精力的に行っていた。下位は先述したマローネと共に行っていた日本の詩の翻訳のみならず、第一次世界大戦後の1920年には日本文学のみならず日本文化全般を紹介する雑誌 *Sakura* を創刊している[5]。*Sakura* は、1920年６月から1921年３月の間に全六号（五号及び六号は合併号として発行）を出版。編集者には Elpidio Jenco、Giulio Gaglione、Attilio Colucci といったイタリア系の名前が続く中、Koreyoshi Dan――すなわち團伊能（1892～1973。なお、第一号では Koreyoshi Dan、第二号以降は名義が INŌ DAN になっている）の名前がある。團伊能は、三井合名会社理事長團琢磨（1858～1932）の長男で、後に東京帝大美術史学科助教授、また第二次世界大戦後には参議院議員を務めた人物である。下位は彼らと共に、日本文化や同時代の日本文学を紹介してゆく。なお、*Sakura* の出版には、イタリア駐箚日本大使館も関わっていた[6]。

そして、下位がイタリアにおいてもっとも深い交際をし、また大きな影響を受けたのが、ガブリエーレ・ダンヌンツィオ（Gabriele D'Annunzio, 1863～1938）である。下位とダンヌンツィオがはじめて邂逅したのは、第一次世界大戦中のことだ。下位は

4　Benedetto Croce, "Ricordi e lettere di amici giapponesi", *Quaderni della "Critica"* Vol. 2 No. 5（Laterza & Figli, 1946）。インターネット上で公開されている（OJS：Open Journals Sapienza, Sapienza Universitá di Roma, http://ojs.uniroma1.it/index.php/quadernidellacritica）。

5　*Sakura* は、国文学研究資料館のデータベースに全巻所収されている。
http://base1.nijl.ac.jp/~kiban-s/database/sakura_pdfpage.htm

6　1924年12月２日付『東京朝日新聞』七面に掲載された記事「十年のナポリを捨てゝ　詩人下位氏帰る」において、「……大使館が宣伝の意味で助けてゐた……」という記述がある。

当時、イタリア駐箚日本大使館の要請で、イタリア軍と日本大使館との間での連絡係を務めていた。その活動の一端であろう、下位は知人の新聞記者の紹介で、ダンヌンツィオの飛行隊が置かれている飛行場を訪ねる[7]。下位とダンヌンツィオは意気投合して、第一次世界大戦後も親しく付き合うようになった。下位は頻繁にダンヌンツィオの屋敷を訪れ、またダンヌンツィオと共に、日本への大陸間横断飛行計画を練っている[8]。そして1919年９月にダンヌンツィオが決行したフィウメ事件（ダンヌンツィオがナショナリストや帰還兵を率いて、当時英米仏伊などの連合軍が管理下に置いていたフィウメ（現クロアチア領リエカ）を武力で占領した事件）では、下位は軍事行動には参加しなかったものの、占領中のフィウメを訪れ、それに対してダンヌンツィオは正餐会を開いてもてなした[9]。

また、下位がイタリアに滞在していた時期には、イタリア近現代史上において重要な出来事が相次いで起きている。下位がイタリアに滞在していた1914年から1924年まで、イタリアでは一次世界大戦にはじまり、第一次世界大戦後の不況、「赤い二年間」と称される社会主義勢力の伸長とこれに反対する右派との抗争、フィウメ事件、そしてベニート・ムッソリーニ（Benito Mussolini, 1883～1945）によるローマ進軍などがあった。下位はこれらの出来事をつぶさに見ていただろう。また熱血漢であり、愛国者であったダンヌンツィオの影響も相まって、下位は次第にファシズムに傾倒するようになった。

1924年（大正十三年）12月、下位は日本に帰国した。下位は、イタリアで新たに生まれた新しい政治運動であるファシズムに精通しているという看板を引っ提げて、1927年（昭和二年）に再びイタリアに赴くまで、日本国内で講演や執筆などの活動を始める。下位が語る講演内容や下位が書いたテキストは、ファシズムを高く評価するにとどまらず、むしろファシズムやファッショ・イタリアを指導するムッソリーニを礼賛するような内容だった。

下位があからさまにファシズムを礼賛するような言動を取ったのは、日本国内における下位自身の立ち位置――すなわちファシストであるということを明確にするためだろう。下位はファシストという立場を明確にし、そして下位自身の手で日本国内にもファシズムを広め、自らを日本におけるファッショ運動の牽引役たらんとしていた

7　土肥秀行「下位春吉とナポリの文芸誌「サクラ」―下位春吉伝(下)―」（イタリア図書(40)、イタリア書房、2009年）P.3

8　下位春吉「滞伊十八年 ダヌンツィオとムツソリーニとを語る」（『現代』14(7)、大日本雄弁会講談社、1933年）PP.54-55。イタリア－日本間大陸横断飛行計画は日本の新聞でも報道され、1920年（大正九年）１月19日付『東京朝日新聞』には、日本人詩人・下位春吉がダンヌンツィオの操縦する飛行機に同乗して帰国する、という記事がある。もっとも、飛行計画はダンヌンツィオがフィウメ占領を敢行したため、飛行計画は流れることとなった。

9　下位春吉「ダンヌンツィオの横顔」（『改造』20(4)、改造社、1938年）P.456

のだ。その証左として、彼が1925年（大正十四年）10月に立ち上げた興国青年党という政党がある。石川龍星著『日本愛国運動総覧』によると、興国青年党は日本におけるファシズム政党として発展拡大させることを念頭に、下位の郷里である福岡県に八ヶ所の支部を設立し、党勢の拡大に努めていたという[10]。もっとも、興国青年党は資金不足により、1927年夏頃に解党しており、ファシズムを広めようとした下位の意図は頓挫する。

また、日本のファシズムの牽引役たらんとした下位春吉だが、ファシズムを正しく理解していたのかという点については、疑問を呈さざるを得ない。下位は講演や著作などでファシズムの実行主義的な面や愛国的な性質を訴えるが、ファシズムそのものの定義や特色については「国民の歴史並に伝統を基礎とし、現代に最も必要適切なる施設を施し、国民精神を統一し、以て樹立する実行的運動[11]」と語るだけで終わる。下位はファシズムを、思想としてではなく、愛国的な実践運動と考えていたのだろう。そのため、講演や著作のほとんどをムッソリーニの行動や事業について語ることに終始している。しかし、そのムッソリーニの行動や事業についても、ムッソリーニやファッショ・イタリアに対する批判はなく、その記述は一面的だ。たとえば下位は、ファシズムについて、次のように語っている。

> 日本の武士道、あの日本古来の道徳の精神と、全然同一である。日本の忠君愛国主義に、黒シャツを着せ、マンガネルロを持たせたものだと思ふ。だから日本人には、あのファッショの問題は、話を聞いたら直ぐ手を拍つて理解があつて然るべきである[12]。

ファシズムを安易に武士道と同列に並べることは、乱暴な議論と言わざるを得ない。また、上の記述が載せられている本（『フアツシヨ運動』）では、ひまし油を使った拷問も紹介されており、これを下位は「其人の生命よりも大切な其人のデイグニチーを懲しめるのが目的である[13]。」と言い、「以前の一高の賄征伐のやうな意気[14]」に通じると評している。ひまし油による拷問は相手の尊厳を罰するためだという考えは、礼節や名誉を重視する武士道とは明らかに背馳するものであり、学生寮の食事に不満

10　石川龍星「日本愛国運動総覧」（『戦前社会思想事典第六巻』、大空社、1992年）PP. 35-37。原本は、1932年に東京書房より出版されたが、ここでは1992年に大空社が出版した復刻版を使用する。
11　下位春吉述『伊太利の組合制国家と農業政策』（ダイヤモンド社、1935年）P. 8。下位春吉述『下位春吉氏熱血熱涙の大演説』（大日本雄弁下位講談社、1933年）P. 91でも同様の定義を示している。
12　国民新聞社編集局編　下位春吉述『フアツシヨ運動』（民友社、1925年）PP. 18-19
13　下位上掲書 P. 16
14　下位上掲書 P. 13

を持つ学生たちが騒ぎを起こした賄征伐とは程遠いものだろう。

もっとも、当時イタリア・ファシズムに精通した人が少なく、その一方でイタリアに長年滞在し、ムッソリーニとも親交があったと触れ込む[15]下位春吉という存在は、日本社会では物珍しく、貴重な存在であっただろう。また下位が学生時代に培った童話口演の技能が活かされたのだろうか、下位の講演は評判を呼び、彼は日本各地で引張り凧となる。そして、その講演先のひとつに、福島県会津若松があった。

二、白虎隊記念碑を巡る騒動

外務省外交史料館所収『本邦記念物関係雑件／白虎隊記念碑関係 第一巻[16]』によると、1928年（昭和三年）１月５日付で、イタリア駐箚日本大使から当時の外務大臣田中義一（1864～1929）宛に「在当地下位春吉ノ行為ニ関スル件」という件名の電報が打たれている。電報によると、当時の陸軍次官畑英太郎中将（1872～1930[17]）からイタリア大使館付陸軍武官に対して、以下のような依頼がなされた。すなわち、下位春吉が帰国した際、ムッソリーニが会津白虎隊の墓前に記念碑を贈る申し出があると下位が語ったため、畑次官ら会津出身者が神戸から会津までの輸送費用を工面したが、その後まったく音沙汰がない、下位の言葉を疑っている者がいるので、そちらで調査して欲しい――、と。この依頼を受けた駐伊大使館の通訳官が、イタリアの日伊協会会長「ベルトラメッリー」氏（アントニオ・ベルトラメッリ Antonio Beltramelli, 1879～1930）に尋ねたところ、ベルトラメッリは「何等知ル処ナキヤ」と答え、さらに「斯事ハ更ニ承知セズ事実無根タルハ勿論右ハ全ク下位ノ売名的偽言ナリ」と断定した。さらに、駐伊大使館員が1927年12月にムッソリーニの官房長「マメリー」氏を訪ねた際に下位の言について尋ねたところ、「マメリー」氏は「飛デモナキ事ナリ察スルニ下位ノ詐偽的言動」だとし、「『ム』首相ノ名誉ニモ関スル事ナレハ自分ヨリ委曲首相ニ報告スベシ首相ハ大ニ不愉快ヲ感ズルナルベシ」と不快感をあらわにさえしたという。

この電報が送られた翌月の1928年（昭和三年）２月１日には、山川健次郎から田中義一宛に一通の書簡が送られた。その内容は、ムッソリーニが白虎隊士を称賛する記念碑を送る旨を下位春吉から伝えられたこと。新聞などでそのことを報じさせたので、このことは広く知れ渡っている。会津の地元民はこれに感動し、当事者である会

15　下位春吉述『ファッショ運動とムッソリーニ』（文明協会、1927年）PP. 95-96
16　JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B04012322200（外務省外交史料館）「本邦記念物関係雑件／白虎隊記念碑関係 第一巻」
17　実弟は、侍従武官長や陸軍大臣を務めた元帥陸軍大将畑俊六（1879～1962）。

津弔霊義会は記念碑の準備をした。その後下位に記念碑に関して督促するが、下位は履行できないという。幣原喜重郎にも助力してもらえるように頼んだ。記念碑を実現するために外務大臣からも働きかけてもらえないだろうか――というものである。

1928年２月28日、外務次官からイタリア駐箚日本大使館宛に電報が送られた。１月５日付電報「在当地下位春吉ノ行為ニ関スル件」と、山川から田中宛に送られた手紙を踏まえたものだった。この電報では、下位について「甚タ無責任ニシテ諸方面ニ面白カラサル影響ヲ与ヘ居ル」と批判しつつも、この件がすでに日本国内で報道され、会津の地元民はおろか日本全国でも注目されていること。そして、山川健次郎や幣原喜重郎といった名士も関心を寄せている。下位の無責任な行動は憎むべきだが、下位自身は不正な利益を得たわけではない。それに、この記念碑が実現しなかった場合には、会津の地元民やこれに協力する名士たちが失望するであろう。何よりも、日伊間の国交上に無用の問題を生じさせる可能性がある。そのため、外務省が駐日イタリア大使に記念碑を贈与するように持ちかけた。駐日イタリア大使は快諾してくれ、この件を手紙でムッソリーニにも伝えてくれるという。その上で、駐伊日本大使館からもムッソリーニに働きかけてほしい――と電報は結んでいる。

その後、駐伊日本大使館がムッソリーニに記念碑贈与を働きかけたところ、駐日イタリア大使館からの連絡もあったのだろう、ムッソリーニは快諾し、さらには自ら石柱を選ぶというおまけもついて、記念碑は無事会津若松に寄贈される運びとなった。そして1928年（昭和三年）12月１日、福島県会津若松市飯盛山において、白虎隊記念碑除幕式が行われた。除幕式には、白虎隊記念碑建設会総裁に就いた高松宮宣仁親王（1905～1987）が臨席し、記念碑建設会会長近衛文麿（1891～1945）、田中義一外相、駐日イタリア大使、福島県知事など、そうそうたる面々が集い、記念碑の設置を祝した。

下位春吉という一個人の根拠のない話は、地元民や新聞、そして日本とイタリアの両政府を巻き込み、その根拠のない話を実現に至らしめたことになる。もっとも、日本政府は下位春吉をまったく評価していない。1928年１月５日付電報「在当地下位春吉ノ行為ニ関スル件」の結びにおいて、下位について、「売名ノ為屡此種詐欺的言動ヲナシ其ノ結果トシテ本邦ニ於テ欺瞞セラレ居ル向モ尠カラザルヤニ認メラルルノミナラズ前顕ノ如ク国交上ニモ面白カラサル影響ヲ及ホス処アル」と酷評している。

また、1928年（昭和三年）11月２日に駐伊大使館から外務大臣宛に発せられた電報「白虎隊頌徳記念柱接受ニ関スル誤報是正方ノ件」には、同年９月27日付（電報では26日付となっている）『東京朝日新聞』夕刊において下位春吉がローマで日本代表として白虎隊記念碑を受け取ったという報道[18]は誤報であるとし、今回の記念碑贈答は「同人ノ無責任ナル言行ノ尻拭ヒトシテ伊国側ノ好意ニ訴ヘ請求シタル」結果実現し

たものであり、下位が中心となったかのような報道は遺憾でもあり、イタリア側にも相済まない、と記されている。また、ローマで行われた記念碑の接受式にはAP通信社やUP通信社も出席していたため、両社にも確かめたところ、両社はそういう報道はしていないという。そのため、駐伊大使館は今回の報道も「下位自身ノ弄策ニ非ラサルナキカ」と考えており、外務本省から報道機関に今回の記念碑贈答はイタリア側の好意によるものだと発表し、下位はまったく関わっていないことにして欲しい、そして「下位一派ニ何等乗ズルノ機会ヲ与ヘザレバ僥倖ナリ」と付け加えた。下位が、駐伊大使館からいかに疎ましく思われていたことがうかがえる。

下位春吉は何故、ムッソリーニが白虎隊記念碑寄贈の意向を示しているという根拠のない話を吹聴したのだろうか。会津出身者らに対するリップサービスという面もあっただろうが、一方では下位自身がイタリア・ファシズムの本家であるムッソリーニと近しいことをアピールするためだったのだろう。上述した通り、下位は日本国内におけるファシズム運動の中心的人物たらんとし、ファシズム政党も立ち上げた。そして講演会などでは、下位はムッソリーニと親交があるように語っている。そうすることで、下位が日本のファシズムを指導するにふさわしいことを訴えるのだった。下位が会津出身者に根拠のない話を語ったのも、その一環だったと考えられる。

さて、イタリアに滞在していた下位春吉は、1933年に再帰国する。その際、『東京朝日新聞』は、下位春吉の帰国理由について、日本政府から帰国命令があったと報じ[19]ているが、その真偽は定かではない。しかし、白虎隊記念碑を巡る騒動で、駐伊大使館から不興を買っていたことは明らかだ。その一方で、日本の周辺では1931年に満州事変、1932年には満州国建国、1933年には中国大陸を巡る一連の問題から日本は国際連盟から脱退しており、日本の周辺情勢は不透明さが顕著となっていた。東アジアの先行きが見通せない中、日本政府の気がかりは欧米諸国の出方である。欧米諸国のひとつであるイタリアは、1932年から1933年にかけてムッソリーニの女婿であるガレアッツォ・チャーノ（Gian Galeazzo Ciano，1903～1944、後にイタリア外相）を駐華公使に任じ、1933年5月にはイタリア政府は中華民国へ軍事顧問団の派遣を決定するなど、中華民国との関係を深めていた。日本政府はイタリア政府の出方を見極めるため、イタリア滞在期間が長く、常々ムッソリーニとの親交を公言していた下位春吉に白羽の矢を立て、そして下位を疎ましく思っていた駐伊日本大使館は厄介払いの良い機会と言わんばかり帰国命令を発した、と考えられる。

18　1928年9月27日付『東京朝日新聞』夕刊二面。記事はローマからの来電として、ローマ市内で白虎隊記念碑の日本への接受式が行われ、下位春吉が日本の代表としてこれを受け取ったと伝えている。

19　1933年5月9日付『東京朝日新聞』十一面

その後、下位は日本に留まり、1924年の帰国時と同じく、イタリア・ファシズムやムッソリーニを礼賛するような講演活動や執筆活動を精力を注いだ。また、1930年代は日本国内でもイタリア・ファシズムやそれを牽引するムッソリーニの指導力がクローズアップされた時期であり、ファシストを自任していた下位は再び各地の講演会に引張り凧となった。

三、日本人が見た下位春吉

日本とイタリアの両政府を巻き込むまでに発展した白虎隊記念碑騒動の発端となった下位春吉について、日本政府、とくに外務省とイタリア駐箚日本大使館は不愉快に思っていたであろうことは、先にも触れた。それでは、一般の日本人は下位春吉をどのように見ていたのであろうか。

上で述べたように、下位春吉は各地の講演会への要請も多く、その講演は好評を得ていたようだ。1933年にダイヤモンド社から出版された下位の講演の速記録『伊太利の組合制国家と農業政策』の「はしがき」では「本文の講演をした下位春吉氏は、わざわざ紹介する必要もないほど有名な[20]」と紹介されている。また下位は、当時出版部数百万部を突破した『キング』をはじめ、『現代』や『改造』といった当時の主要な雑誌に寄稿し、さらには1941年までに四十冊程の著書を出版していた。当時の日本社会において、下位春吉という人物の名が広く知れ渡っていたことがうかがえる。

小説家の吉屋信子（1896～1973）は、1970年に寄稿したエッセイにおいて、下位春吉に触れている。エッセイでは、吉屋がパリに滞在していた1928年頃、吉屋に同伴していた友人の教え子に会うためにローマのフラットを訪ねたという。その教え子の父親が、下位春吉だったのである。吉屋は下位を「ムッソリーニに傾倒した熱血男子」と評するとともに、下位の本棚に泉鏡花の全集が並んでいるのを見て、「親近感を覚えた」と述べている[21]。吉屋が下位春吉の名を前置きや注釈もなく出していることから、下位春吉とは如何なる人物なのかを説明しなくても、戦前の認知度から、当然の著名人と吉屋が彼を遇していたと考えられる。

ファシストを自称し、ダンヌンツィオとの華やかな交際という話題を引っ提げて講演活動で全国行脚する下位春吉に対して、当然ながら批判はあった。その一人が、日本で初めて『資本論』完全邦訳を果たした高畠素之（1886～1928）である。高畠は自著で、下位を「最も熱心なムツソリーニとフアスシズムの紹介者」と評する一方で、

20　下位春吉述『伊太利の組合制国家と農業政策』（ダイヤモンド社、1933年）はしがき
21　吉屋信子「私の泉鏡花」（『日本近代文学大系月報』13、角川書店、1970年）P.1

「職業的紹介者」であると批判している[22]。また、高畠は『読売新聞』紙上で連載していた自身のコラムにおいて、映画を見た際に弁士がムッソリーニを「皇室中心主義者」と称賛していたことに対して、「下位春吉がブローカーでなからうと同様に、ムツソリーニは決して皇室中心主義者でなかつた[23]。」と記述をしたことがあった。これに対して、詩人の福士幸次郎（1889～1946）が、1927年（昭和二年）12月14日付『読売新聞』紙上で、下位を暗にブローカー扱いしたと批判すると[24]、高畠は次のように反論した。

> 大体、この文句からして福士君の言ひ掛りだ。僕が若し『白虎隊の石碑でイクラ儲けた』とでも言つたなら、而して若しそれが事実無根であつたなら、信心がらの福士君が鰯の頭の尊厳を如何に呼称しようと勝手だが、単なる比喩を楯に『身の程知らず』などとは片腹いたい[25]。

高畠は続けて、「が、それもよしこれもよし、降りかかる火の子（ママ）なら『下位春吉』を『ブローカー』とも呼ばうぢやないか[26]」と書く。先述したように、ベネデット・クローチェは下位を「文学の仲介者（intermediario letterario）」と評していたが、これは下位が日本文学のイタリア語訳などを精力的にこなしていたことによる。これに対して、高畠のブローカー呼ばわりは、下位が日本とイタリアの間に立って利益を得ていると高畠は考えたためであろう。高畠がそのように考えた根拠が、『白虎隊の石碑でイクラ儲けた』という記述だった。白虎隊記念碑をめぐる騒動は、日本国内でも報じられており、高畠も当然その報道に接していただろう。下位が引き起こした白虎隊記念碑を巡る騒動は、下位自身の評価に大きな影を落としていたのだ。

高畠素之の批判に対して、下位は何ら反論をしていない。高畠のエッセイが発表されたのは1927年12月以降であり、下位は1927年７月に日本を離れていたので、高畠のエッセイについては知る由もなかっただろう。

結び

下位春吉という人物はどういう考えを持ち、どういう行動指針を取っていたのだろうか。白虎隊記念碑寄贈を巡って、日本政府を巻き込んだ騒動を引き起こし、外務省の不興を買い、また日本国内からも批判を招いている。しかし下位は批判や悪評をも

22　高畠素之『ムッソリーニとその思想』（実業之世界社、1928年）P. 167
23　高畠前掲書 P. 173
24　1927年12月14日付『読売新聞』四面
25　高畠前掲書 P. 186
26　高畠前掲書 P. 186

のともせず、積極的に世に出て、ファシスト・イタリアの代弁者のようにファシズムを礼賛し、ムッソリーニの指導力を称えている。

第二次世界大戦後、下位はイタリア人ジャーナリストのインドロ・モンタネッリ（Indro Montanelli, 1909～2001）のインタビューに応じて、「...nel '35, lui mi propose di tornare in GIappone per fare propaganda d'italianità.（1935年に、彼［ムッソリーニ］は私にイタリア文化の宣伝をするために日本に帰国するように提案した。）」と打ち明けている[27]。その真偽は定かではないが、下位の著作には駐日イタリア大使館付駐在武官や大使館スタッフが関わっていたものがあるのは事実だ[28]。下位の著作に駐日イタリア大使館が関わっていたという事実は、駐日イタリア大使館ひいてはイタリア政府がイタリアとファシズムを宣伝するために下位春吉を支援していたと予想できる。それを裏付けるかのように、下位の著作ではムッソリーニやファシスト・イタリアに対する批判はなく、ムッソリーニとファシスト政権の政策を称賛し、批判の矛先はもっぱら社会主義者やムッソリーニ政権前のイタリア政府に向いている。

だが、下位春吉がムッソリーニの指導力を称え、イタリア・ファシズムを称賛していたのは、プロパガンダだけではないだろう。第二次世界大戦中の1943年９月、ナチス・ドイツが北イタリアで樹立した傀儡政権（イタリア社会共和国、サロ政権）の首班にムッソリーニが据えられたとき、日本にいた下位は新聞社からのインタビューにおいて、ムッソリーニの復活を祝い、ムッソリーニとイタリア・ファシズムの将来に声援を送っている[29]。ムッソリーニは43年７月にイタリア王国首相の座を追われており、ムッソリーニとイタリア・ファシズムの凋落は明らかであった。ムッソリーニとイタリア・ファシズムに陰りが見えても、ムッソリーニに声援を送っている点から、その程度は不明だが、下位はムッソリーニを尊敬し、ファシズムへの信頼が揺るぎないものであったことがわかる。

下位がイタリア・ファシズムに傾倒したのは、友人であったガブリエーレ・ダンヌンツィオの影響もあるだろうが、ファシスト党政権下において、労使協調が推し進められ、社会問題の解決のための政策が実施され、農業生産の改善や農村の近代化を促しているのを見て、イタリア・ファシズムの有用性を感じ取ったのではないか。また、下位とムッソリーニは同い年である。自分自身と同い年の男が国家を強力に指導して

27　Indro Montanelli, "Shimoi" *L'impero bonsai*（Rizzoli, Milano, 2007）P. 169。1935年となっているが、下位の帰国は1933年である。おそらく下位の勘違いか、モンタネッリの誤記であろう。

28　下位の著書の中には、駐日イタリア大使館付武官グリエルモ・スカリーゼ（Guglielmo Scalise）が出版を引き受けたもの（『イタリヤのエチオピア征服』1937年など）や、駐日イタリア大使館付情報官のミルコ・アルデマーニ（Mirko Ardemagni）が書き、下位が日本語に訳したもの（ミルコ・アルデマーニ原著『欧洲戦後の世界革新』1940年など）がある。

29　1943年９月28日付『読売新聞』三面

いる姿を見て、下位はムッソリーニに対して競争心を持ち、また彼に倣おうと考えたのかもしれない。

下位があからさまにムッソリーニを礼賛し、ファシズムを称えるような言動を繰り返していたのは、日本国内における下位自身の立ち位置――すなわちファシストであるということを明確にするためだったと思われる。その一環として、自分がファシズムの本家であるムッソリーニと近しい関係にあることをアピールするために、会津若松で白虎隊記念碑寄贈の話を持ちかけたのだろう。

下位春吉は、講演会などでファシズムを「国民の歴史並に伝統を基礎とし、現代に最も必要適切なる施設を施し、国民精神を統一し、以て樹立する実行的運動」と定義している。下位はファシズムを思想ではなく、実践的な運動であると考えていた。ファシズムに関する下位の講演や著作は、ムッソリーニの行動や彼が進めた事業に紙数が割かれている。下位が考えるファシズムは、行動や事業の結果が重要なのであって、経過は枝葉末節と考えていたのだろう。白虎隊記念碑の騒動を引き起こしておきながら、それについて気にした素振りを見せなかったのは、結果的に記念碑は日本に到着し、無事飯盛山に安置されたのだから構わないだろう、と考えていたのかもしれない。もっともこの件を負い目には感じていたのか、後の彼の講演や著作において、白虎隊記念碑について取り上げられることはなかった。

日本とイタリアの両政府を巻き込んだ騒動を引き起こした下位春吉という人物は、未だ不明な点が多い。第二次世界大戦前の日本において、ナチス・ドイツの勃興と日独の急接近でイタリア・ファシズムの影は薄くなり、下位春吉もその流れの中で埋没していった。第二次世界大戦後は、枢軸陣営への支持扇動の罪により、下位は1951年まで公職から追放され[30]、その三年後の1954年11月30日、下位は脳出血のため自宅で亡くなる[31]。日本におけるファシズムの牽引役たらんとした下位という人物と業績について、今一度その位置を確かめる必要があるように思われる。

参考文献

JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B04012322200（外務省外交資料館）「本邦記念物関係雑件／白虎隊記念碑関係 第一巻」

石川龍星「日本愛国運動総覧」（『戦前社会思想事典第六巻』、大空社、1992年）

国民新聞社編集局編 下位春吉述『フアツシヨ運動』（民友社、1925年）

下位春吉述『伊太利の組合制国家と農業政策』（ダイヤモンド社、1935年）

下位春吉述『下位春吉氏熱血熱涙の大演説』（大日本雄弁会講談社、1933年）

---

30 Indro Montanelli, “Shimoi” P. 169。総理庁官房監査課編『公職追放に関する覚書該当者名簿』（日比谷政経会、1949年）P. 570に下位春吉の名がある。

31 1954年12月１日付『朝日新聞』夕刊三面に訃報が掲載されている。

下位春吉「滞伊十八年 ダヌンツィオとムツソリーニとを語る」（『現代』14(7)、大日本雄弁会講談社、1933年）
下位春吉「ダンヌンツィオの横顔」（『改造』20(4)、改造社、1938年）
下位春吉述『ファッショ運動とムッソリーニ』（文明協会、1927年）
高畠素之『ムッソリーニとその思想』（実業之世界社、1928年）
土肥秀行「下位春吉とナポリの文芸誌「ラ・ディアーナ」―下位春吉伝(上)―」（『イタリア図書』39号、イタリア書房、2008年）
土肥秀行「下位春吉とナポリの文芸誌「サクラ」―下位春吉伝(下)―」（『イタリア図書』40号、イタリア書房、2009年）
藤岡寛己「下位春吉とイタリア＝ファシズム―ダンヌンツィオ、ムッソリーニ、日本―」（『福岡国際大学紀要』25号、福岡国際大学、2011年）
吉屋信子「私の泉鏡花」（『日本近代文学大系月報』13、角川書店、1970年）
総理庁官房監査課編『公職追放に関する覚書該当者名簿』（日比谷政経会、1949年）
『朝日新聞』（オンライン記事データベース「聞蔵Ⅱビジュアル for Library」）
『読売新聞』（オンライン記事データベース「ヨミダス歴史館」）
Benedetto Croce, “Ricordi e lettere di amici giapponesi”, *Quaderni della “Critica”* Vol. 2 No. 5 (Laterza & Figli, 1946)
Indro Montanelli, “Shimoi” *L’impero bonsai* (Rizzoli, Milano, 2007)
Reto Hofman, “The Fascist Reflection Japan and Italy, 1919–1950” (Colombia University, 2010)